

志免町竪坑櫓の有効利用に関する調査研究報告



志免町議会議員 古庄信一郎 (写真右)
 々 野上順子 (写真左)
 々 吉田耕二 (写真中央)

(写真・直方市石炭記念館にて)

始めに

志免町議会では平成13年度より「政務調査費」制度がスタートし、これを利用して、日本の近代化と志免町の繁栄と歴史を担ってきた志免鉱業所に残された世界に誇れる貴重な近代遺産である「竪坑櫓」の保存と、周辺の有効利用を実現する為に、国内での鉱山史跡資料館等、先例を調査研究することとした。

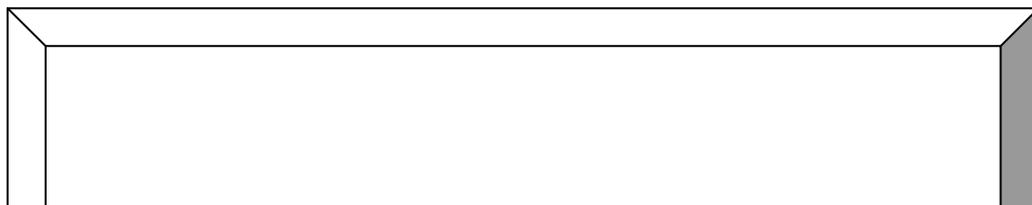
実施迄の経緯

14年1月末から調査研究を始めるにあたり、まず古庄、野上、吉田、3名で調査目的と趣旨確認を行い、意見の一致を見たので共同調査研究を行う事とした。また、政務調査費(税金)を使った調査研究だと言う事をしっかりと認識し、共通のコンセプトを持ち、この趣旨に値する先例地の候補をインターネット等で調査し、スケジュールを設定した。

結果、志免町と同じように石炭産業で繁栄した有名な地域として大牟田、筑豊宇部地区があり、そこには数々の史跡と資料館が有る事がわかり、これらの視察を行なう事とした。

また「近代化遺産」として、国の重要文化財指定の実現に向け、所轄官庁である、「文化庁」の志免町竪坑櫓に対する認識と位置付けの把握及び保存、有効利用等に関する助言を得る為、訪庁する事とし、その際全国的にも有名な常磐炭鉱の資料館と鉱山のテーマパークとして民間運営がなされている「ゴールドマイン高山」を視察する事とした。

視察レポート



大牟田市、荒尾市地区 …… (H14. 1)

- ①大牟田市石炭産業科学館 ②三池港周辺史跡
- ③宮浦石炭記念公園と三池炭鉱宮浦坑跡 ④三池炭鉱宮原坑跡
- ⑤荒尾市万田炭鉱館 ⑥三池炭鉱万田坑跡

大牟田市から荒尾市にかけて広がっていた日本一の炭鉱が三井三池炭鉱であり、これを基幹産業として発展してきたこの地区にとって、依然多くの貴重な近代遺産が残存している。

石炭産業の街、その歴史と現実を直視し、マイナーイメージから逃避する事なく、逆にそれらを、プラスの遺産、つまり観光ルートとして確立し、地域全体で展開している。

観光パンフレットに記された言葉がこれらへの思いの全てを物語ってくれています。

それは「歴史の足跡で心に出会う」「触れて下さい、大牟田にたたく歴史の息吹、近代日本の夢」「進化を目指す人と文化、技術に彩られた日本の明治、大正、そして昭和。炭鉱の街、大牟田はその中心にありました。時代の情熱を伝える建造物は今も近代日本の夢を語り続けています」と記されています。

また日本近代化の証人「近代化遺産」をこう説明している。「江戸時代の鎖国政策で、近代化した世界に遅れた日本が、江戸時代末期から政治、経済、文化、科学技術などの分野で押し進めた近代化。その時代の歴史的遺産が「近代化遺産」であると。

① 大牟田市石炭産業科学館



大牟田地区の文化の拠点として、また「近代化遺産」観光の中心的施設として建設された。

中は石炭誕生、炭鉱技術、大牟田の炭鉱史、石炭エネルギーのあゆみ、といった歴史コーナーと、石炭エネルギーの未来を学ぶコーナー、模擬坑内探検コーナー

といった多様なコーナーが設けられ展示品も多く充実した施設となっている。事務所で市職員の方に伺うと、建設費は28億円で、平成12年の入場者12000人、運営は財団法人で年間の維持費は3千万円、大牟田市よりの補助金は年間6千万円程度との事。(大牟田市の年間予算600億円)

② 三池港周辺遺跡…三池港閘門(おうもん)

三井三池炭鉱の歴史とともに発展してきた三池港周辺にも多くの遺跡が存続している。三池炭鉱三川坑跡、三井港倶楽部洋館、三川電鉄変電所、旧長崎税関三池支署、等の建造物から、5m以上の干満差でも大型船が入れるように2枚のイギリス製鋼板門扉が水位を保っている閘門など。



③ 宮浦石炭記念公園と三池炭鉱宮浦坑跡

(記念公園と煙突)



坑口とトロッコがあり、煙突も現存。これは高さ31m。建造1888年で登録文化財に指定されている。またこれらの施設を取り囲むように緑化された公園として整備されている。

(坑口とトロッコ)



公園内には落書きもゴミ一つ無く周辺住民の思いや、心がひしひしと伝わってくる。

④ 三井三池炭鉱宮原坑跡 (国の重要文化財)

明治31年開坑。年間40～50万トンの出炭を維持した主力坑で、現存する櫓は、第二豎坑の櫓として明治34年完成の人員昇降用銅鉄製櫓。高さ22mでこの下に垂直160mの豎坑が今も残っている。

周辺の炭鉱住宅は取り壊され、近く公園として整備される

ようで、櫓の前のお家の方に話を伺うと(写真左)、豎坑への恐怖感(倒壊等)はなく、早く公園化される事を望まれていた。また、元ここで働かれていた従業員の



方が、懐かしく訪れられる事もしばしばで、毎年集会も開催されている。

このような豎坑櫓と環境を誇りに思っているとのことのお話を大変感銘深く伺った。



⑤ 荒尾市 万田炭鉱館

三井三池炭鉱の主力坑、万田坑の側に荒尾市が平成12年に地域コミュニティと資料保存の併用目的施設として建設されたもので(写真右)、鉄筋コンクリート平屋建て、延べ床面積、714㎡。中は



展示室に炭鉱で使用された道具や機械、模型が展示されている。また多目的ル

ーム、研修室等もあり、視察時はちょうどダンス教室が開催されていた。ここの管理は荒尾市企画調整課とシルバー人材センターが管理。年間700万円の維持管理予算で運営されている。



来場者は12年6月開館から12000人が来館。ボランティアで元、炭鉱で働いていた方が「語りべ」として、来場者に説明をされていた。ここには志免町と同じ建て方(ワインディングタワー式)の豎坑櫓「四山第一豎坑櫓」(高さ48m)があったが、平成6年に突然会社の方針で倒壊され今はその写真だけが展示されている。市職員の方も(写真左上)、語りべの方も、「この櫓が今残っていれば大変な財産になっていた」と悔やまれ、「志免町の櫓は何としても存続してほしい」との要請まで頂いた。

.....

⑥ 万田坑豎坑櫓と巻揚機室 (国の重要文化財)

万田石炭館の北側に万田坑の豎坑櫓と巻揚機室のレンガ建てが静かにたたずんでいる。

万田坑は平成10年に国の重要文化財、12年には、「国史跡」に指定された。

ここは行政視察であれば中にも入れるとの事で、再度訪問したい。



(夕暮れ時の万田坑豎坑櫓)

福島県、いわき市(常盤炭鉱)・郡山市地区 …… (H14. 2)

① いわき市石炭、化石館 ② ゴールドマイン高山

① いわき市石炭、化石館

(いわき市石炭化石館)

石炭館へ行くタクシー車中で運転手さんから、「あの山はズリ山で木が生い茂っているから判らないでしょう」と話し掛けられた。ズリ山とはボタ山の事だった。



常盤炭田は、北は福島県富岡町付近から、南は茨城県日立市付近まで、石狩、筑豊炭田に次ぐ大炭田で、いわき地区の本格的採炭は1883年以降、最盛期は130余りの炭鉱があった。昭和51年に最後の炭鉱が閉山した。

また、いわき市には、古生代から新世代までの多くの化石が発見されており、



石炭の歴史と化石関係をテーマパークとしているのが「いわき市石炭化石館」です。

1階は化石展示室、2階が石炭展示室で炭鉱のしくみ、使われた器具、常盤炭田の歴史、石炭の利用



法などが模型、ビデオ、実物で説明、展示されている。また模擬坑道には、実際に使われる枠が多数組み時代ごとにステージが作られ採炭状況の移り変わりが再現されている。また生活館では昭和10年頃の炭住や戦後の世話所、共同炊事場も復元されている。



(坑内詰め所)



(採掘風景)



(共同炊事場)

この石炭、化石館も建設費は20億6千万円程度で建設された。裏には昭和の杜六坑園(写真下左)があり、ここは昭和22年に昭和天皇が炭鉱従業員慰問の為入坑された人車坑の坑口が保存されている。

入り口左に太陽光熱発電施設があり(下中写真)有効利用されている。

また施設後方の赤い豎坑櫓は(写真下右)模擬的に建設された物で、これがなけれ

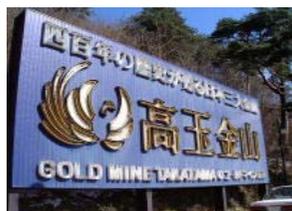
ば施設のインパクトが全然違う。新しく作る事のコストを考えると本物の有効利用、保存がいかに大事か。



② ゴールドマイン高山

鉱山全体を有効利用する一方法として、鉱山の坑道見学をテーマパークとしている施設を視察する。

この鉱山は金の採掘鉱山で1573年に高玉金山として開山、大正7年生産開始、昭和51年に閉山、平成8年、民間が山を借りて観光施設として再開坑した。



この会社は資本金5千万円ของบริษัท。

坑道は金山そのまま、700mの坑道をトロッコで約1時間かけて観覧する。

従業員は3人程度でこれだけの規模を運営し経営的にも問題なく運営されている。

坑内にはいろんなステージがあり、トロッコの運転手の方が親切に解説をしてくれた。いくつもの坑口があるが、特に大堅坑（写真右左）



は、頭上30m地下230mの採掘坑で、その大きさ、そして 堅坑内への人、物の巻揚げ室の空間は圧巻である。



田川市・直方市(筑豊)地区 …… (H14.11)

①田川市石炭資料館 ②直方市石炭記念館

① 田川市石炭資料館



敷地面積 4.143 m²・鉄筋コンクリート造り2階建てで、第1展示室は石炭の成り立ちや採掘方法、働く人々や生活の様子を展示し炭鉱の歴史が一目でわかるようになっていた。手掘り時代の時代の様子を再現したもので当時の厳しい坑内労働がしのばれた。男性に混じり働く女性の姿に強さを感じました。

第2展示室は炭鉱の生活から生まれた絵画や文学作品が展示。第3展示室は「田川地方の歴史と民俗」をテーマに郷土の歴史資料を展示しており、この地方に住んでいた人々の生活の歴史が学べる。

屋外展示場は2本の大煙突や竪坑櫓・SL・採炭掘削運搬などの大型機械類を展示されている。

隣接する「産業ふれあい館」(写真上)は、明治・大正・昭和と時代ごとに炭鉱住宅を再現しており、そのかなたに香春岳が望まれ、炭鉱で働く人々が歌う「炭鉱節」が聞こえてくるような錯覚を覚え感動した。

また資料館の隣には「総合福祉センター」が併設されており(写真右)、高齢者の方々が昔をなつかしみながら一時をすごされている光景を見、ほのぼのとした気持ちになった。



② 直方市石炭記念館



記念館の本館は(左写真の左建物)明治43年に筑豊石炭工業組合が直方会議所として建築し、昭和43年まで九州炭坑救護隊連盟直方救護練習所として使われ昭和44年に粕屋町に移転したあと、建物が石炭記念館として利用される事となった。市の指定文化財にもなっており、中には日本最古の救命器などが展示され、保安面に関する専門的な展示が興味を引いた。裏には坑口と斜坑が(写真上)保存され



ている。

また各地の主な炭坑が紹介されておりその中に「志免鉱業所」を説明した資料や志免炭坑八尺層内松岩の細工物(前ページ写真右)や風景画も展示されており改めて「志免鉱業所」の価値を見直し、アレンジし、町づくりに生かす事の必要性を痛感した。

山口県、宇部市地区 …… (H14, 11)

①宇部市石炭記念館

① 宇部市石炭記念館



宇部市常磐公園の中にあり昭和44年に完成。これは市民の寄付金による日本で初めての石炭記念館である。

宇部炭坑発祥の地に2階建ての簡素な造りの建物の中に貴重な文献、機材や模擬炭坑が整備されている。

特に印象に残ったのは、100インチスクリーンを利用した「石炭ものがたり」の映写で、映像を利用する事によって小さなスペースを有効利用することの大切さを再認識した。

また施設の象徴である「櫓」は(写真右)宇部興産東見初炭鉱で閉山まで活躍した豎坑櫓を移設し展望台として再利用している。



文化庁での面談(東京都) …… (H14, 2)

志免鉱業所は、我が国唯一の国営炭鉱として栄え、その豎坑櫓は、ワインディング式では世界有数のものであり、櫓の高さは日本一です。

今回の調査研究で訪れた大牟田宮原坑櫓、荒尾万田坑櫓、いずれも国の重要文化財に指定されているが、志免町の豎坑櫓はそれらにも勝るとも劣らぬ、それ以上の価値と威容を誇る櫓で、現に土木学会を始め、マスコミでもその評価は門司港



駅舎や長崎オランダ坂と並び賞賛されているのに、行政当局、国、県、町からの声が全然聞こえてこない。

これから、この豎坑櫓の存続を議論して行く上で、どうしても国の(文化庁)認識、評価の把握、そして、有効利用、保存の方法、重要文化財等への指定についてのアドバイスを求める為に、文化庁を訪問した。

(写真…志免庁舎より豎坑櫓を望む)

(文化庁面談者) ◇ 建造物課登録部門、主任文化財調査官、工学博士 堀勇良

◇ 建造物課、文部科学技官、工学博士 北河大次郎

堀調査官は平成11年10月に志免町で開かれた九州産業考古学会主催のシンポジウム「地域社会と産業遺産、志免炭鉱が残したもので、基調講演をされた方で、古庄も聴講したが、北河技官ともどもの話として、国の近代化遺産として評価されるのは、文化庁が平成2年から国庫補助事業として実施した「日本近代化遺産総合調査」を受け、各県が調査し報告されたもの(福岡県は平成5年、「福岡県の近代化遺産」として(財)西日本文化協会が発刊)に掲載されている史跡等をもって対象としているとの事で、志免町の豎坑櫓は何ら明記されていない。「なぜこれに志免町の豎坑櫓は掲載されなかったのか」と逆に指摘を受ける。この件については別途調査する。

重要文化財指定は、市町村教育委員会(文化財担当)、県教育委員会がその重要性を認知し、国に指定を求めるもので、国からの独自指定はしないとの事。

今後の方法として、① 福岡県より、その史跡の評価が国へ追加報告されれば認知する事となる。また、② 全体の価値から「史跡」として助成を受けるとか、③ 町おこし、商業活性の観点からの補助制度利用、④ 登録文化財制度、等々の助言を受けるが、他にもいろいろな制度があるとの事で今後研究が必要である。

また大牟田、荒尾の重要文化財指定の経緯を訪ねると、一言で言うと「地域あげての指定運動が功を奏した」事だそうだ。

今後も引き続き指導頂く事を願います。



(志免豎坑櫓下交差点より)

参 考

参考までに志免町における立坑櫓の保存・活用に関する文化財保護審議会の要望書と町よりの回答について掲載いたします。

(写真右…壊された鉱業所倉庫跡)

志免町文化財保護審議会答申



志免町長 南里久雄殿

平成10年9月3日

志免町文化財保護審議会

会長 稲永文雄

志免鉱業所立坑櫓の保存・活用に関する要望書

拝啓、時下ますますご清祥の事とお喜び申し上げます。

さて、去る8月27日に開催されました志免町文化財保護審議会において、志免鉱業所跡地に残る立坑櫓について、下記のように貴重な近代遺産であると、全委員の意見が一致しております。

つきましては、志免鉱業所立坑櫓を後生に残し、その周辺に残された産業遺産を含め保存・活用について協議を進められますよう緊急に要望いたします。

記

- わが国で一貫して国営炭坑として経営された唯一の炭鉱の遺跡である。
 - 粕屋炭田はわが国有数の炭田であったが、粕屋炭田の唯一といってもよい優れた遺跡である。なお、久山町に麻生山田炭坑の遺跡が残存しているが、民有地でいつ取り壊されるかわからない。
 - かつて九州では約100の立坑櫓が建設された。しかし残存する櫓は、三池および池島の立坑櫓を除くと、三井田川(筑豊)・三菱古賀山(唐津)と本坑のみである。
 - 九州でワインディングタワー式(塔櫓捲式)の鉄筋コンクリート製立坑櫓は、四山第一立坑(三井三池)・大之浦立坑(貝島)と本坑であったが、残存するのは本坑のみである。
 - 本坑の櫓高52.2メートルはわが国最高である。
- 立坑が斜坑口・扇風機坑口の施設や、ボタ山と一体となって残存している点において、大変貴重な遺跡である。



また、各地でさまざまなシンボルトワーが巨額の費用を使って建設されていますが、本立坑櫓は志免町の自然史および社会史と不可分のもので、志免町のシンボルトワーとして最適のものです。

以上

(写真左…解体前の扇風機坑口と櫓)

南里辰己町長よりの回答

志免鉱業所立坑櫓の保存・活用に関する要望書について(回答)

(要約)

まず前提として立坑櫓及び排気坑等は新エネルギー・産業技術総合開発機構の所有施設である。

この施設を本町で買いたいまたは保存を決定する事は出来ない。

立坑櫓の完成から現在まで50数年経過した中、特に昭和39年7月志免鉱業所閉山からは放置されたままの状態であり、土地利用の観点から活性化を阻害する要因でもあることは「共通の認識」。

こうしなか、払い下げの申請と保存可能性調査を実施、その結果。

- ①下層階の老化が著しく、初期の耐荷力はない。「早急に解体するか補強するか」の対策が必要。
- ②補強をする場合は下層階については開口部と補強のコンクリートの断面欠損部の補修及びコンクリートの中性を防止する必要がある。
- ③立坑櫓工事費 ○解体の場合 3億4千万円 ○補強の場合 3億6千万円

以上、指摘されました評価を述べたが、これとは別に当地には排気坑口、扇風機坑口があり、その天井はクラックが生じており崩壊の危険性。その延長線上には地下坑道が幾重にも走っているのが判明。

このような事実を勘案すると貴会からの要望にお応えするのは困難である。

(写真右…立坑櫓内部)



回答への意見

産業考古学のシンポジウムや、実際に建築に携わった方のご意見、町文化財担当者等の話では、この回答書中の内容に疑問を呈する意見もあり、100年以上は大丈夫との見解もある。たった一業者の調査だけでなく各方面からの調査と意見を掌握したうえでの議論が肝要である。

活性化を阻害するのではなく、活性化の中心的役割を担う遺跡とも言える。

(写真下…総合福祉センター建設前の風景)



私達の意見

各地の資料館、記念館などを見学調査し特に感じた事は、志免町豎坑櫓の圧倒的な存在感です。

豎坑及び周辺の環境整備をする事によってこの地域の「らしさ」を形作るシンボルとして有効

利用できると確信をしました。

志免町の総合福祉センターの一部に資料館を設置するなど資料の展示と共に、豎坑櫓はできるだけそのまま保存をし多くの方々に志免町及び周辺地域の現在から未来への夢を語る材料の一つにして頂きたいと思います。 (吉田耕二)

2年間にかけ「豎坑櫓」を保存したいという思いで調査を行って来ましたが、志免町に生まれ育っていない私にとっては炭坑と言うのは本で知る事のみでしたが、大牟田を始め各場所を回るたびに深い歴史を思い、この歴史を残すと言うへの大切さをひしひしと感じました。

また、この視察で「豎坑櫓」を残すと言う問題だけではなく、今ある物を利用した町づくりをどう考えるかもこれからの志免町にとって大切だと感じました。私達の時代に大切な歴史を知り残す事、その歴史を町づくりの柱とする事を勉強いたしました。 (野上順子)

今回訪問した先は、石炭と言う産業で繁栄をして来た地域の歴史と文化を、素直に受け止め、それを堂々とオープンにいろんな形で利用していました。

資料館では、大きなテーマパークとして、地域全体の町作りの中心施設と位置づけているものや、公民館的地域密着型の多目的ホールを含んだ、



ボランティアでの資料館など、そのスケールの違いはありますが、地域と歴史を誇りに思う人の心が基本にある事は同じでした。

いずれもその周辺には、建物や櫓が必ず併設なり保存をされ、歴史を形あるものとして残し後に教えると言う素晴らしい理念の基に運営がなされています。

また文化庁での話で、近代化遺産はその歴史も浅くその価値や指定はその地域の近代化にどれだけ貢献したか、その評価と思いの重さ、つまり住民感情によって決まる事も理解しました。

他自治体は地域のシンボル作りと町興しに苦労しているのに、志免町には世界に誇れるシンボルを持っているわけで、世界有数の「豎坑櫓」と日本一長い「緑歩道」そして七夕池や光正寺古墳群や周辺の須恵町、宇美町、太宰府市の史跡群とを回遊できる歴史の町づくりも町興しの一つでは。

世界に誇れる我が志免町の「豎坑櫓」 この存続に、次の時代を担う子供達の声「豎坑櫓があるけん志免やろうもん」を大きく受け止め、真剣に議論する事が今一番望まれる事です。 （古庄信一郎）

終わりに

この資料は「豎坑櫓の保存活用議論」への第一歩と考えます。
この資料の不備を補う沢山の資料や声が喚起される事を願い豎坑櫓の有効利用の実現に向け今後も私達は活動する事を誓い報告といたします。

発行者

福岡県粕屋郡 志免町議会議員

古庄信一郎・野上順子・吉田耕二